議員研修講座 シリーズ

# 女性議員はどうすれば増えるのか

連載 第18回

# 女性の政治進出のために必要なものは何か

## 長野市議会女性議員アンケートからわかること

寺沢（てらさわ） さゆり　長野市議会議長

プロフィール

1968年、新潟県上越市生まれ。1990年、日本福祉大学福祉学部卒業。大学では老人福祉ゼミを受講。ヨット部に所属し、世界選手権に2回出場。2007年の市議選で初当選し、現在4期目。2018年9月から1年間、副議長を務めた。2021年9月に第51代長野市議会議長に就任（1897年に市制が施行されてから51代目議長で、女性議員の就任は初めて）。

Key Points

○「子育て支援」からスタートした議員生活
○長野市議会の全9名の女性議員にアンケートを実施した
○スローガンだけでなく具体的な支援策を実行せよ

### ヨットをきっかけに新潟県民から長野県民へ

このたび寄稿の機会をいただいたが、まずは議員となるまでの自らの経緯を振り返ってみたい。

新潟県で産声を上げ、大学生となって高校まで過ごした故郷を離れた。大学時代から始めたヨットがきっかけで長野市に住むようになり、現在、長野市議会議員として4期16年目を迎えている。

「なぜ海のない長野県でヨットを？」と疑問に思う方もおられるだろう。大学3年の時にヨットの世界選手権に出場し、もう一度出場したいと思っていた。そこに「我が社に入って出場してみないか」と長野県の会社社長から声がかかったのである。その一言に乗って長野で就職した。

だから毎週末はもっぱらヨットに乗りに行っていた。結局、長野に友人がいないまま結婚退社。やがて子育てを始めたのだが、夫が仕事に行くと彼が帰ってくるまで、大人の話し相手は誰もいない状況となった。否応なく、世の中からぽつんと取り残されてしまったのである。

そのような折、特別養護老人ホームで「ボランティア喫茶」を始めては、という話が持ち上がった。子育て中の母親たちで一緒に「子連れボランティア・グループ」を作って参加しよう、というのである。その活動を続けるうち、いつしか「子連れボランティア喫茶」や「子連れ情報誌」作りなども始めるようになった。

誰かに「ありがとう」と言われる体験は貴重だ。自分の存在が認められたように感じる。自分ではボランティアを「している」つもりだったが、いつの間にかボランティア「されていた」のである。





今になってあらためて実感している。

### 「子育て支援」から議員生活をスタート

そのような中のこと。ある日、朝起きたら左顔面がまったく動かない。左目が開きっぱなしであった。最重度の顔面神経麻痺になったのである。年子の子育ての最中だったが、「辛い」と誰にも言えない状況で、極度のストレスが原因となったのだった。

その後、同じ子育て中の母親たちに話を聞くと、彼女たちも大なり小なり育児のストレスが身体に現れていた。当時は自分自身がとても辛い日々を送っていたが、彼女たちとの会話を通じて「自分と同じ思いをする人が一人もいなくなるように」との思いが芽生えた。

そこで小児科医をはじめとした子どもに関する専門家の方々と「子ども支援」や「子育て支援」を始めるに至ったのである。

一連の支援活動を続ける原動力は、「親も子どももみんな力がある。その力を引き出すのが支援者の役目」との思いであった。

こうして行政から委託事業などを受けるようになり、こちらからも様々に現場の声を伝えながら、事業提案までするようになった。

しかしどのような事業でも、行政にまったく理解してもらえない局面は必ずある。どのように進めたらよいのか――悩み続けるしかなかった。

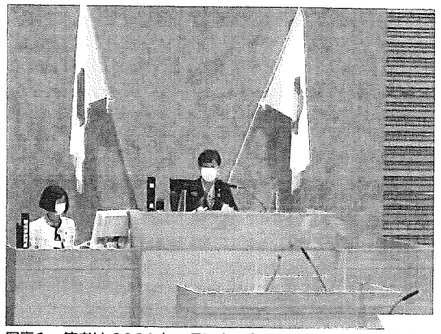

写真1　筆者は2021年、長野市の市制開始以降初の女性議長に就任した。壇上の寺沢議長（中央）と畑議会事務局長

そのような時に、ある女性議員の方から「引退するから自分の後に出て」と声がかかったのである。

仲間たちからは「現場の声を届けて」と応援をもらうことができたし、夫からも「今しかチャンスがない、やったら」と背中を押してもらうことができた。こうして2007年、長野市議会議員に立候補することを決意し、無事当選を果たしたのである。

しかし、当時3人の子どもたちは小学生であった。学校でのいじめへの不安はもちろんのこと、自分が議員として宿泊を伴う視察に出掛けるときはもう気が気ではなかった。議員生活を継続するのは心底悩みがつきまとったが、家族の協力があり、現在までなんとか乗り越えることができたようである。

ただ、休みの日に会議等に出ていたりすれば、「子どもたちだけで留守番させているのはかわいそう」とか、「誰が食事を作っているの？」など、やいのやいのと言われることは確実にある。すべては「女性だから」というのが理由だ。それこそ心ないことを言われたり、冷たい対応をされたりもする。それを乗り越えられたのも家族のおかげなのかもしれない。

いまだに「あなたが偉いのではない。協力してくれる家族が偉いのだ」とよく言われるので、そこは素直に認めるようにしている。

### 長野市議会に在職するすべての女性議員に聞いてみた

さて、今回原稿を執筆させていただくにあたり、長野市議会の在職議員38名中、9名の全女性議員にアンケートを実施した。

女性議員の現状について寄せられた意見を設問ごとに紹介していく。

まず、「議員になる際、女性として苦労したことがあるか」について尋ねた。

結果は9人中4人が「苦労したことがある」との回答だった。自分の政策に対する評価ではないところで批判的な言葉を投げかけられたり、家族の反対があったり、子育てや介護などと重なって辛かったりしたという。立候補後の選



040-043_2303_議員研修講座_cc2020.indd 41　2023/02/08 15:37
040-043_2303_議員研修講座_cc2020.indd 40　2023/02/08 15:37

挙運動から当選後の議員活動まで、議員としての活動は多忙を極める。そこに女性という要素が加わるなら、ハードルの高さがさらにアップする。子育てや介護、家事などが山積しており、周囲のサポートがないとクリアは難しいと言わざるを得ない。

次に「**政治分野における男女共同参画の推進に関する法律の現状について**」を聞いてみた。

平成30年（２０１８）に成立した「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律」は令和３年（２０２１）に一部改正されている。しかし、依然としてハラスメント防止の強化が必要な状況にある、という意見があった。女性が安心して政治分野で活動できる環境整備が必要なのだ。現状では何かを犠牲にしないと女性の政治活動の継続は難しい。これから議員をめざす女性には「男性議員との上手な付き合い方」を伝えることも重要だ、という具体的な意見もあった。学校現場ではＰＴＡ会長、地域では区長など、代表という立場に男性が就くと「おさまりが良い」とする慣習が日本社会には存在する。このことは政治分野にも適用されると思う。引き続き社会的認識変革の浸透やハラスメントに関する対応強化等が求められるだろう。

３問目として「**議員になる際、または議員になった後、女性であることが壁だと感じたことはあるか**」と尋ねた。

支援者ではない有権者から実際に「未婚で子どもがいないので市民に信用されない」と言われた、という回答があった。議員になった後も「有権者や同僚議員からのハラスメントを受けたことがある」という。被害を受けた側が我慢しなければならないという空気感は、まさに壁だ。声を上げること自体にまで壁を感じるとも。結局「自分の身は自分で守るしかない」ことを負担に感じるという意見があった。また、男性にはない女性ならではの限界を表す「ガラスの天井」の指摘もある。選挙期間中の議員は昼も夜も忙殺されるが、家族への申し訳ないという思いはもちろんのこと、自分が不在のための子どもへの悪影響など心配ごとも絶えない。自分が男性であったらこんな心配はないのでは、などの声も寄せられた。

４問目「**議員活動と家庭生活の両立について、思うこと、感じることがあるか**」については、「家族の理解や協力がなければ続けられない仕事」との回答や、「議員という職業柄、子どもたちへの影響が大きかったように思う」などの声が上がった。そのほか「活動と家庭とのバランスに悩みながらスケジュール調整に葛藤する」、「女性が議員活動に参画するための社会的支えをどう作るかが課題」、「議員は24時間３６５日働くのが当り前なのか？　子育てや介護、地域活動等においても他の職業と同じようにワーク・ライフ・バランスが尊重され、多様な在り方が認められると良い」などの意見があった。

多くの議員が、議員活動を行う上で時間が不規則なことから、家庭との両立に苦慮しているのだ。

５問目「**政治分野における女性の参画において必要な策はあるか**」と聞いてみたところ、「男女共同参画が謳われる今日、女性が社会に出るのはさほど困難ではないが、その際、性差に囚われない家事の役割分担の整理は重要」、「多くの女性議員誕生のためには政治家の意識改革が必要。党派に関係なく、入口を身近にできるかは現役の女性議員にかかっている」、「家庭生活をサポートするサービスの充実が必要」などの意見があった。

さらに「学生時代からの主権者教育、ジェンダーバイアスのない教育により、男女関係なく多様な職業をめざせることが浸透するのが望ましい」、「議会・議員側も、市民並びに有権者に地方政治への関心を高め、候補者や議員を見る目（評価する力）をも高めてもらう努力をしていくべき」などの意見もあった。

## アンケート結果からわかること

今回のアンケート結果から、実際に女性議員の現状についての考え方を聞き、「見える化」することができた。



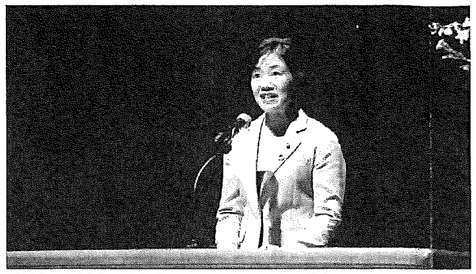

写真2　2022年10月、ホクト文化ホール（県民文化会館）で開催された全国市議会議長会の第17回研究フォーラムで挨拶する筆者

写真3　上記研究フォーラムのパネルディスカッションに参加する筆者（右端）

まず感じたのは、議員という職業の特殊性だ。ワーク・ライフ・バランスを保つのがとても難しく、家族をはじめ周りの理解と協力がなくては続けられない。単に「女性の議員を増やしたい」と言い続けるだけでは話にならない。具体的な支援策も併せて提示しなければ、女性は立候補することを躊躇してしまうだろう。

女性の政治進出を進めるうえで必要なのは、議会や議員に興味のある方々が自由に参加でき、現役の女性議員から話を聞いたり相談できたりする「議員と市民のサロン」的な場なのではないか。これから議員をめざしたいと考えている女性にとって、こういった場が職業の特殊性への理解を深める一助になると考える。

さらに議員になった後も悩みを相談したり自由に意見を交換したりすることのできる場があればなおよいだろう。定期的にそういった場を設定することも一考を要する。

また、地方議会で女性議員の不安の軽減を図る方法の一つとして、女性議員のネットワーク等による議員間のサポートがある。家族のサポートと同様にこれは重要である。同じ立場でフォローし合っていくことが、これからの女性議員の増加に結びつくのではないだろうか。

そのほか、女性議員に対してのハラスメントは相変わらず問題だ。何期目になっても体験することだが、特に初めて立候補し、当選したばかりの新人女性議員が被害を受けるケースが多い。せっかく議員になっても1期でやめてしまうことのないよう、先輩議員のサポートは必須と考える。議会内でのハラスメント防止研修はもとより、市民に対しても啓発活動を今まで以上に実施していくことが必要だ。

## 長野市議会での取組み

最後に長野市議会の、主に女性議員に関する動きについて紹介したい。

平成12年（２０００）、会議規則の第2条第2項を改正した。出産を間近に控えた議員は、出産予定日の8週間（多胎妊娠の場合は14週間）前の日から出産日後8週間を経過する日までの期間、あらかじめ議長に欠席届を提出できるようになったのだ。当時議会に出産予定の議員がおり、6名いた女性議員の尽力の賜物といえよう。令和3年（２０２１）4月からは会議規則に育児、看護、介護、配偶者の出産補助を追加した。

また、今年度はハラスメント要綱を作り、議会内のハラスメントに対して適切に対処する体制作りを行った。女性議員が安心して活動し得る環境を、少しずつではあるが進めている。

「女性議員はどうすれば増えるのか」というテーマは、今後も長野市議会の全9名の女性議員とともに追究していくことになる。また「女性だから」「男性だから」ではなく、議会に興味を持ち議員になりたい人たちが議会で活躍できるような長野市議会にならねばならない。そのために積極的に努力をしていきたいと考えている。



040-043_2303_議員研修講座_cc2020.indd 42　2023/02/08 15:37
040-043_2303_議員研修講座_cc2020.indd 43　2023/02/08 15:37